アジアの風

第１３号
2007年9月25日

題字　宋　貴美子

編集・発行　アジア児童文学日本センター（[redacted]）

シンポジウム　台湾と日本の絵本　大阪府立国際児童文学館で開催

３月４日（日）午後、シンポジウム「台湾と日本の絵本」（主催・大阪国際児童文学館　後援・アジア児童文学日本センター／日中児童文学美術交流センター）が大阪府立国際児童文学館講堂で開かれ、１００人近い参加者で賑わいました。

これは《中国語圏の絵本と日本の絵本》をテーマとするシンポジウムの第１回目で、台湾から絵本作家の頼馬氏を招き、日本からは絵本作家の長谷川義史氏に登壇していただきました。ご両人とも、それぞれ子どもたちに高い人気のある作家で、頼馬氏はパワーポイントを駆使しながら、自身のこれまでの絵本制作の歩みと特徴を語り、長谷川氏は絵を描きながら絵本に寄せる思いを語りました。そのあと、二人の対談というかたちで、絵本の魅力、絵本作りのポイントなどについて話が進められました。

このシンポジウムの内容をまとめた報告と、台湾の絵本についての５篇の論文を載せた冊子（中国語・英語・日本語）が発行されています。代金は２０００円（郵送の場合はプラス３７０円）。この冊子の問合せ・申し込みは、電話（０６−６８７６−８８００）またはe-mail（info@iiclo.or.jp）で大阪国際児童文学館まで。

第９回アジア児童文学大会

2008年7月27日から台湾で

第９回アジア児童文学大会の要項が発表され、次のとおり開催されることとなりました。会場、交通案内、参加申し込み等、詳細については後日連絡があります。

◆　◆

開催時期　2008年7月27日（日）ー31日（木）
主 催 者　国立台東大学児童文学研究所
大会主題　“土、土、土”――生態、グローバル化と主体性（Ecology, Globalization, and Subjectivity）
副 主 題　１．アジアの児童文学と生態文学
２．グローバル化の傾向がアジア児童文学に与える影響
３．アジア児童文学の発展の場と主体性
４．児童文学の自然描写と生態倫理
５．土地倫理思考からの児童文学の未来
６．人と自然の共生、アニメやマンガ作品の生態における議題
論文発表　各国　６篇
参加費用　１人　６００ドル(台湾滞在中の宿泊費・食費を含む)

◆　◆

この大会の代表を務める台東大学人文学院院長・林文宝氏は、「大会の目的」について、当センター畑中会長あての書簡の中で次のように述べています。

「今大会の目的は、我々の存在する地球から出発し、生態の議題との結合及びグローバル化のインパクト下において児童文学の内容、外観、売り上げの変化、と同時にアジア児童文学がグローバル化のインパクトの下どのように均衡を保たせるか、特定の場所における主体性などの議題、大会においてアジア地域の学者や専門家が出版、創作、論述など多方面の討論によりアジア児童文学の発展において直面する問題や未来の傾向を現す事にあります。」

大阪国際児童文学館

アジアの絵本貸出セット

◇　韓国絵本セットＡ　７６冊
◇　韓国絵本セットＢ　１０３冊
◇　中国語圏絵本セット
①台湾絵本セット　８５冊
②中国絵本セット　２７冊

貸出料：無料。(運搬費等は各団体で負担。)
貸出期間：１日ー１ヶ月
問合せ先：大阪府立国際児童文学館
Tel. ０６-６８７６-８８００

アジアの風のたより

韓国の作家 権正生氏 逝く

絵本『こいぬのうんち』、少年少女小説『モンシル姉さん』『わら屋根のある村』などの作品で日本でも著名な作家・権正生氏が去る５月１７日に亡くなられました。享年７０歳でした。

このことについて、『わら屋根のある村』の訳者である仲村修氏から、次のようなコメントが７月２７日のメールで届きました。

◆　◆

最近インターネットでやっと遺書を確認しました。

「印税は子どもたちによって生じたものなので、彼らに返さなければなりません。飢えた北の子どもたちのために用い、もしなお余りあればアジア・アフリカの飢えた子どもたちのために用いてほしいと思います。南北が憎しみ合わず争わず統一をなしとげ、幸せに暮らせたらと願います。」

まことに先生らしく、感動的で、民族作家らしい遺言でした。先生は安東の片田舎で、せまい二間に小さな台所のついた古く小さく粗末な家に長らくすんでおられました。(たくさんの本が天井まで積み上げてあって部屋はさらに狭く感じられました）ベストセラー作家でしたから建て替えて瀟洒な邸宅に住めるだけの財力は十分おありだったと思います。

ともあれ、これで１９４５年の解放以来、李元寿とならぶ偉大な児童文学作家を、韓国は失ったことになります。もちろん、３、４０代の若い作家たちが育っていますが。

キム・ファン氏の出版記念会

第１回子どものための感動ノンフィクション大賞を受賞したキム・ファン氏の作品『サクラ――日本から韓国へ渡ったゾウたちの物語』が３月、学研から出版されました。また同じ時期に韓国のウリ教育社から《自然と共に生きる》シリーズの１冊として同氏の『コウノトリ』(韓国語)も出版されました。

この２作品の出版を祝う会が去る４月２９日１８時から、京都市のザ・パレスサイドホテルで開かれました。韓国からはウリ教育社の社長をはじめ、評論家の李在馥氏も出席され、また豊岡市コウノトリ共生課長の佐竹節夫氏などコウノトリの関係者、動物園関係者、新聞記者、イラストレーター等々、多彩な参加者でした。そのことからも、日頃キム・ファン氏がいかにさまざまな領域の人々とふれ合いながら取材し、執筆しているかがよく分かりました。氏のたくましい行動力と豊かな人間性に改めて拍手を送りたくなるような、明るく楽しい出版記念会でした。

第６回韓国朝鮮児童文学セミナー

オリニの会・オリニほんやく会の主催する「韓国朝鮮児童文学セミナー」も今年で６回目を迎え、４月７日午後、神戸学生青年センターで開催されました。

ノンフィクション作家の真鍋和子氏の講演が予定されていましたが、体調不良で実現されませんでした。プログラム前半は仲村修氏の報告「日本における０６年韓国朝鮮児童文学・絵本」と、同氏の「自訳朗読――未紹介の説話世界から」でした。前者は単行本の紹介のほか、雑誌、新聞、各種機関紙等に発表された「創作作品の評論・紹介」や関連のセミナー、講演など、韓国朝鮮児童文学に関する情報を幅広く収集、整理したもので、きわめて貴重なデータと言えます。

後半は作家李慶子氏の講演「南北を訪問して」と作家キム・ファン氏の講演「コウノトリとゾウがつないでくれたもの」でした。李慶子氏は主に「北」の児童文学事情について述べ、キム・ファン氏は今日までのノンフィクション作家としての自らの歩みを率直に語り、それぞれに興味深い講演でした。

毎回新しい参加者もあり、今回の参加者は２０数名。仲村修氏を中心とするオリニの会・オリニほんやく会の皆さんの地道な活動によって、このセミナーが定着しつつあることがうかがえます。

国際児童文学学会（IRSCL）

第18回世界大会を京都で開催

アジアでは初めての国際児童文学学会(IRSCL)世界大会が８月 25 日から５日間、京都市の国際会館で開かれ、全期間参加登録者は３２０名を数えました。そのうち日本の参加者は１９７名でしたが、ほかのアジア各国からの参加はさほど多くはありませんでした。すなわち、台湾から１４名、韓国から５名、インドネシアから２名、マカオ（中国）、インド、フィリピンからは各１名という状況でした。

大会の使用言語が英語だけということや、参加に伴う諸経費が旅費を含めると１０万円以上かかるということなど、アジア各国からの参加にはむずかしい問題があったと思いますが、アジアからの参加が少なかったのは残念でした。

大会２日目に開かれたシンポジウム「戦後日本の児童文学――アジアの中の日本」は佐藤宗子氏の司会、奥山恵、目黒強、成實朋子３氏の提言で進められましたが、時間的な制約もあり、《アジアの中の日本》という視点での論究の深まりは見られませんでした。

なお当センター会員でこの大会に参加したのは、大倉尚美（北海道）、たに・けいこ（鹿児島）、成實朋子（愛知県）、畑中圭一（京都府）の４氏でした。

モンゴルで絵本交流

たに・けいこ氏からの便り

昨年８月、ソウルで開かれたアジア児童文学大会で多くの人々と会った中で、モンゴルのダシドンドク氏と今年６月にモンゴルで絵本の交流をもつことができました。

モンゴルは１９９０年に民主化されたものの、今も大変な状況で絵本も少ないと聞き、クリスマスに私は出来たばかりの絵本『森になったクリスマス』をモンゴルの子どもたちに１００冊プレゼントしました。一方、ダシドンドク氏からは大自然をテーマにした作品が送られて来たので、私は挿絵を描いて紙芝居を作り、その共同作品を持って、６月に大草原の国モンゴルへ初めて行くことになったのです。

ウランバートルは１００万人の定住者で満ちあふれ、山並みに囲まれていて、なつかしい私の子どもの頃の素朴な風景。３０分も車で行くと、もうそこは草原という不思議な空間のモンゴル。日本の４倍もの国土には、ゆったりとした時間が流れています。

６月９日、ダシドンドク氏と息子さん、通訳の津田紀子さんと一緒に、絵本交流のためのキャンプ地へ向かいました。待っていた２００人ほどの子どもたちはほとんど都市のウランバートルに住み、モンゴルの大自然と触れ合いを持つため２週間ぐらいここで暮らすそうです。共同作品の紙芝居を日本語と通訳のモンゴル語で読むと、みんな前の方にかたまって集まり、熱心に聞いている姿に、物語に国境はないのだと胸が熱くなりました。

次の日、遊牧民の住居「ゲル」を訪ね、子どもたちにプレゼントの本を読んであげたり、一緒に生まれたばかりのヤギの子どもを抱いたりして子どもたちの無邪気な心に触れ、忘れられない感動のひとときを持てました。また自然と一体となった自給自足の遊牧民の生活は、暖かな家族の絆に満ちていました。今回のモンゴルの子どもたちとの絵本交流を機会に、互いの国の理解を深め合う創作活動につなげて行けたらと願っています。

新刊紹介

韓国と日本の子どもの詩 こだま

李在徹・監修　保坂登志子・編　徐正子・訳
2007年８月　洛西書院刊

雑誌『こだま』（１９９２年創刊）でアジア各地の子どもの詩や少年少女詩を取り上げ、詩を通しての文化交流に力を注いでいる保坂登志子氏が、これまでの歩みの一つのまとめとして刊行した韓国と日本両国の子ども詩集である。それぞれ２０篇ずつの詩が選ばれ、ハングルと日本語で掲載されている。

これらの子どもの詩を読んでいて、ふと気づいたことがある。韓国の子どもの詩には、自然の草や花、風景、季節のうつりかわりなど、いわゆる「自然」を歌ったものが７篇で、３分の１を占めているのに対して、日本の子どもの詩には自然を歌ったものが皆無で、逆に自分の生き方や周囲の事象に対して「なぜ？」と疑問を投げかけたり、思索したりする作品が５篇もある。また韓国の子が家族を歌った作品は５篇、友だちを歌ったものは１篇であるのに対して、日本の子は家族２篇、友だち４篇となっている。それぞれ２０篇という数少ない作品の比較だから断定的なことは言えないが、一考を要する数字ではないかと考えた次第である。（畑中圭一）

◇◇雑 誌 紹 介◇◇

『小さい旗』１２３号（２００７年早春）

◇「朴在龍・聞き書き“おれに暦の無かった日々”」
富永敏治作
◇「×点パパ」　楊紅櫻・作　馬場与志子・訳
ほか。

『小さい旗』１２４号（２００７年夏）

◇「わなにかかった母オオカミ」　黒鶴・作
NINECATS・絵　水上平吉・訳
◇ 中国の少年詩 三篇
張紹民・作　馬場与志子・訳　　ほか。
【連絡先】 北九州市八幡東区尾倉３−７−１０
水上平吉氏　☎０９３−６６１−４４８８

『まゆ』第１０５号（２００７年８月）

◇「あと少しだったのに」トウデブ・ロドン作
ジンサランジャワ・バーサンスレン訳
野崎斐子・編集　柳沢暁美・絵
作家紹介とモンゴル教育事情　　津田紀子
◇「黄砂にのってきた悟空（２）小笠原洽嘉
ほか。
【連絡先】 札幌市手稲区稲穂２−２−４−１０
ソレイユＢ２０１　越智道子氏
☎０１１−６９１−２０８７

野間国際絵本原画コンクール

第15回コンクール入賞作品展

国立国会図書館 **国際子ども図書館**

９月２２日〜２００８年１月１３日

グランプリ受賞作品「ホタルが光るようになったわけ」（インド、プラデュムナ・クマール作）をはじめとする入賞作品が展示される。（入場無料）

☆　こんな催しが行われました　☆

◇展示　台湾絵本の、今。

大阪国際児童文学館　　４月１日〜２９日

◇展示　韓国現代マンガ展

川崎市民ミュージアム
４月２１日〜６月３日

◇展示　ちひろとアジアの絵本画家たち

ちひろ美術館　　５月９日〜７月１日

◇お話会　モンゴル語の絵本

大阪国際児童文学館　　６月１７日

◇展示　韓国絵本の魅力

京都国際交流会館　　８月１日〜５日

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アジア児童文学資料　配布しました

当センターのデータベース作成事業の第１ステップとして「アジア児童文学資料」と題する印刷物を先日会員の方々にお届けしました。アジア児童文学に関する「論文・解説等の参考文献」と「発表・講演等口頭発表記録」を表で示したものです。まだ残部がありますので、ご希望の方は事務局までご連絡ください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あとがき

第９回アジア児童文学大会開催要項の骨格が台湾の台東大学から届き、さらに日程の変更についての連絡もありました。開催要項の最終版も間もなく届くことと思います。すでに数名の方が論文発表の準備を進めておられますが、会員の皆さん、大会参加の意思決定を早めにお願いします。なお会員以外の方々の参加も大歓迎ですので、お知り合いやお仲間への参加呼びかけをお願いします。　（畑中圭一）